

いのち
生命のにぎわいとつながり

No.60

平成31年1月

新年おめでとうございます。2019年は亥年です。本号では、私たちの身近な存在でありながら謎の多い、イノシシと、その仲間たちについて特集するとともに、生物多様性に関する市町村職員研修、連携大学との研究成果発表会、文化の日千葉県環境功労者表彰などについて報告いたします。

イノシシと、その仲間たち



イノシシの剥製（千葉県立中央博物館所蔵）

今年の干支の動物はイノシシです。イノシシといえば、千葉県でも身近で、最近では獣害を引き起こす動物としてマイナスイメージが強いかもしれません。今回はそんなイノシシの仲間の、生き物として面白いところを紹介していきたいと思います。

CONTENTS

1	イノシシと、その仲間たち	1
2	生物多様性に関する市町村職員研修が開催されました	3
3	連携大学との研究成果発表会を開催しました	3
4	文化の日千葉県環境功労者を表彰	4
5	千葉県の希少種（スナメリ）	4

●イノシシ科の分類と特徴

千葉県にも生息しているイノシシは、哺乳綱偶蹄目イノシシ科に分類されます。偶蹄目、つまり蹄が偶数ある仲間です。偶蹄目には、ラクダ科、カバ科、ウシ科、シカ科などが含まれます。最近では、カバ科とクジラ類が近縁ということが分かり、クジラ類と偶蹄類を同じグループに含めて鯨偶蹄目とすることもあります。



その中で、イノシシ科は系統的に古く、比較的原始的な特徴を残しているとされています。例えば、ツノがなく、反芻しません。にもかかわらず、皆さんもご存知の通り、イノシシ科の仲間はとても繁栄しています。その理由は、雑食性でいろいろなものを食べることができ、一度にたくさんの仔を産み、草原や森林などの様々な環境に適応することができ、新天地へ移動して住み着く能力も高いためです。とてもたくましい生き物といえますね。分布域も広く、イノシシ科はアジア、ヨーロッパ、アフリカに生息しています。大陸だけでなく小さな島にも生息できるため、東南アジアの島々にも多様な種が暮らしています。

●日本に分布しているイノシシ

日本に生息する野生のイノシシ科の仲間はイノシシ(学名 *Sus scrofa*)です。イノシシは、イノシシ科の仲間の中で最も分布域が広く、日本の本州・四国・九州・琉球列島、世界では東アジア、東南アジア、西アジア、ヨーロッパまで分布しています。雪には弱いようで、深い積雪が長期間ある東北や北陸地方などには分布していません。世界中で飼育されている家畜のブタも、生物学的にはイノシシと同種になります。

日本のイノシシには2亜種があるとされています。本土に生息する亜種ニホンイノシシ(学名 *S. scrofa leucomystax*)と、琉球列島に生息する亜種リュウキュウイノシシ(学名 *S. scrofa riukiuanus*)です。特

に後者は独特で、イノシシの中では最も小型で、本土や台湾のイノシシと歯の形や遺伝子の一部が異なっているので、別の種かもしれないと考える研究者もいるほどです。

●世界の珍しいイノシシの仲間

世界にはイノシシ科の仲間が19種いるとされていますが、その中から珍しい特徴を持った仲間を紹介します。

<その1 バビルサ>

インドネシアの熱帯雨林に生息しています。その独特な形態が有名で、オスは上下の犬歯(キバ)が頑丈で長く、特に上顎の犬歯は上に向かって弧を描きながら伸び、運が悪いと犬歯が自分の頭に刺さってしまいます。



セレバスバビルサの頭骨

長い犬歯はオス同士の競争のために進化したとされ、メスの犬歯は短い、もしくは、ない場合もあるそうです。それにしても、痛そうです。

<その2 コビトイノシシ>

イノシシ科の中で最小の種で、大きさは中型犬くらいしかありません。現在、インドのヒマラヤ山脈の麓だけに分布しています。

1971年に「再発見」されるまでの約20年間は絶滅したと思われていたほどで、現在でも特に絶滅が心配されている種です。イノシシ科の仲間ではこの種だけが巣を作る習性があり、土を掘って干し草を積み上げるそうです。「イノシシの巣」、日本のイノシシに慣れていると不思議な感じがしますね。

(下稲葉 さやか 千葉県立中央博物館)

千葉県立中央博物館の今夏の企画展のテーマは「ほにゅうるい」。会期は2019年7月13日(土)～9月23日(月・祝)です。身近な動物たち、動物園の人気者、ちょっと変わった珍獣まで、世界・日本・千葉県に生息する多様な哺乳類のはく製や骨格を展示して、かたちや暮らしを紹介します。

生物多様性に関する市町村職員研修が 開催されました

平成30年10月23日（火）に千葉県立中央博物館講堂において、「平成30年度生物多様性に関する市町村職員研修」が開催されました。この研修会では、生物多様性地域戦略と特定外来生物についての解説を行い、市町村の生物多様性地域戦略の一例として、「生物多様性いちほら戦略」について、市原市環境管理課の高橋眞澄氏から発表をいただきましたので以下に内容を紹介します。

『生物多様性いちほら戦略』

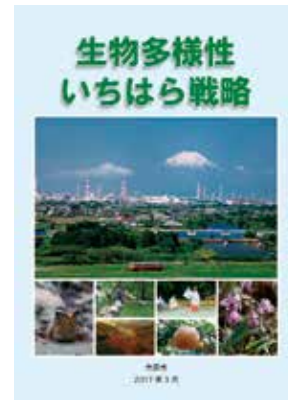
市原市では、平成6年に実施した自然環境実態調査以降、長年、自然環境の実態が把握できていない状況にありました。そこで、市内の自然環境の現状を把握することにより、自然環境保全事業を計画・実施していくための基礎資料及び市民向けに自然環境保全の啓発を推進するための教材として、平成22年9月から約1年間、環境を特徴づける生物で、かつ、少なくなってしまった在来種などを調査し、市原市自然環境マップを作成しました。この調査では、県内でも希少となった動植物が確認できた一方で、減少が懸念されている種も確認されました。

また、市原市の生態系については、昭和30年代からの高度経済成長による地形の改変、農業従事者の高齢化などによる里山の縮小、イノシシなどの有害獣の増加・分布域の拡大などの影響が懸念され、これらの要因に対して具体的な行動を起こす必要があるとされました。

そこで、『市原市の未来の子どもたちに対して、豊かな生物の多様性を保全し、その恵沢を享受でき自然と共生する社会を残すため』生物の多様性に関する施策等のあり方を示し、総合的かつ計画的に推進するために『生物多様性いちほら戦略』を平成29年3月に策定しました。そして、現在、優先的な課題などに対応するため定めたリーディングプロジェクトに取り組んでいます。

『生物多様性いちほら戦略』は市原市のホームページ (https://www.city.ichihara.chiba.jp/kurashi/kankyoryokuka/kankyo/kankyoku_keikaku/tayouseisenryaku.html) で公表しています。

(酒井 さと子 千葉県生物多様性センター)



生物多様性いちほら戦略 表紙

連携大学との研究成果発表会を開催しました

平成30年11月17日（土）に千葉大学松戸キャンパスにおいて「平成30年度千葉県と連携大学との研究成果発表会」を開催しました。これは、平成20年度及び平成27年度に千葉県と連携協定を締結した県内にキャンパスを有する8大学の生物多様性保全等に関する研究成果を発表する場で、今年度で9回目となります。

今回は「水域・湿地の生物多様性」をテーマに、特別講演2題、口頭2題、ポスター19題の発表がありました。

特別講演では、千葉大学大学院理学研究院の土谷岳令教授による「水生植物の生態系での機能」に関する講演と、「利根運河の生態系を守る会」の相澤章仁氏から自身が行なっている身近な湿地や草原植生の管理と生物モニタリングについて発表をいただきました。

また、松戸市及び千葉県生物多様性センター、江戸川大学、千葉大学、千葉科学大学、千葉工業大学、東京情報大学から発表が行われ、約80名の参加者が集まり、熱心な議論が交わされました。

なお、発表された講演要旨は、千葉県生物多様性センターのホームページ (<http://www.bdcchiba.jp/>) に掲載しています。

(酒井 さと子 千葉県生物多様性センター)



特別講演聴講の様子

文化の日千葉県環境功労者を表彰

ヒメコマツ研究グループ 藤平量郎氏

平成30年11月3日（土）の文化の日に、房総丘陵の森林や沢植生などを調査研究されてきた藤平量郎氏が、文化の日千葉県功労者表彰の環境功労者として表彰されました。

この表彰は昭和23年に文化の日が制定されたのを機に始まり、今回で71回目となります。今年度は60名2団体、中でも環境功労者として2名の方が表彰されています。

藤平氏は永年にわたり、高等学校教諭として生物教育に携わる傍ら、植物の調査研究を行い、絶滅の危機にあった県内のヒメコマツの生育調査のため、平成12年に「房総のヒメコマツ研究グループ」を設立し、保護活動等に尽力されました。

千葉県における絶滅危惧種の回復事業として取り組んでいる、「千葉県ヒメコマツ保全協議会」には平成20年の設置当初から委員に就任され、平成22年の「千葉県ヒメコマツ回復計画」の策定や、植栽試験、モニタリングなどの各種保護事業の推進に寄与し、県の最重要保護生物であるヒメコマツの保護にご協力いただいています。

表彰のご紹介とあわせて、お祝い申し上げます。

（小野 知樹 千葉県生物多様性センター）



お知らせ

いのち
～生命のにぎわい調査フォーラムの開催～

いのち
生命のにぎわい調査フォーラムを開催します。
調査団員の活動報告や写真コンテストを行います
ので、興味をもたれた方は是非ご参加ください。

日時：平成31年3月2日（土）13:00～16:00

場所：県立中央博物館 講堂

定員：先着100名・参加無料



生物多様性ちばニュースレター No.60 平成31年1月15日発行

編集・発行

千葉県生物多様性センター（環境生活部自然保護課）

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2（千葉県立中央博物館内）

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <http://www.bdcchiba.jp>

リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

千葉県の希少種

スナメリ



（千葉県レッドデータブック：一般保護生物D）

スナメリは水深50m以浅の浅い海を好む小さなイルカです。見た目は背びれのない白っぽい体に、くちばしを持たない愛嬌のある顔をしています。背中には皮膚が盛り上がった隆起が尾びれ付近まで続いていることも特徴です。体長は大きくても2mほどでクジラの仲間としては最小の部類に入ります（イルカとクジラに明確な区別はなく、どちらもクジラ類にまとめられます）。

スナメリの仲間はペルシャ湾から日本にいたるアジア地域に生息しています。近年の研究の結果、体の色や大きさ・背中の隆起等の特徴から、元々1種類だと思われていたインド洋・南シナ海のスナメリと、中国から日本にかけて分布するスナメリは別種であることがわかりました。

千葉県の沿岸にもスナメリは生息しており、外房ではよくスナメリの姿が観察されています。銚子ではスナメリウォッチング船が出ているほどです。一方、内房での目撃情報は多くありません。しかし、昔は東京湾でもよく観察されたそうです。スナメリの好む水深50m以浅の沿岸域は、人間の活動の影響を受けやすいところですので、そのため、高度経済成長による大量の生活排水の流入や、埋め立てによる干潟や藻場の消失によって、環境の悪化した東京湾ではスナメリが減ってしまったと思われる。

それでも東京湾のスナメリはいなくなったわけではありません。今でも目撃情報や座礁報告があります。東京湾も徐々に環境が改善していると言われており、豊かな海に戻ればスナメリも昔のように増えるかもしれません。いつか当たり前に東京湾でスナメリに出会える日が来るよう、私たち1人1人が海のことを考え、守っていくことが大切です。

（宮川 尚子 千葉県立中央博物館）